



TITLE:

# 日本語指示詞の認知的研究--ソ系指示詞における「聞き手」の位置づけ再考

AUTHOR(S):

小川, 典子

---

CITATION:

小川, 典子. 日本語指示詞の認知的研究--ソ系指示詞における「聞き手」の位置づけ再考. 言語科学論集 2008, 14: 57-88

ISSUE DATE:

2008-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/88067>

RIGHT:

# 日本語指示詞の認知的研究

## 一ソ系指示詞における「聞き手」の位置づけ再考—\*

おがわ のりこ  
小川 典子

京都大学大学院

norikogawa@gmail.com

### 1. はじめに

私たちは言葉を用いて他者と様々なものを共有する。その中でも指示詞は、「注意の共有」という機能に特化した言語表現であると言える (cf. Clark 1996, Diessel 2006)。加えて、指示詞は、話し言葉・書き言葉を問わず、私たちの言語体系の中で常に現れる、欠くことのできないものである。

本稿では、特に現代日本語の指示詞に焦点を当て、認知言語学の立場から考察する。そして、単に指示詞を分析するだけではなく、指示詞研究のあり方といった、従来問われることのなかった指示詞に関する議論の背景についても考察を行う。さらに、発達心理学等の知見を援用しながら、指示詞研究の土台として必要不可欠である「指示詞の本質とは何か」を検討していく。これにより、指示詞研究のあるべき姿を提示することも試みる。

本稿の意図は次の2点である。1点目は、日本語の指示詞研究において争点となっているソ系指示詞に関して、特に「聞き手」に注目して、その意味・機能をボトムアップ的に明らかにすることである。2点目は、従来の指示詞研究における言語観や枠組みといった背景的部分を改めて認識し、指示詞研究の土台として必要不可欠である「指示詞の本質とは何か」を明確にすることである。

### 2. 先行研究

日本語には、コ・ソ・アという3系列の指示形態素が存在し、名詞、形容詞、副詞など広く分布している（以下、これら3系列の指示形態素を含む語彙を「指示詞」と呼ぶ）。それゆえ指示詞に関する研究は多岐に渡り、また数も多い。本章では、コ・ソ・ア全体を扱った従来の主要な研究を個別に概観し、それぞれの研究の問題点についても触れる。また、これらを整理することにより、指示詞研究における争点がソ系指示詞であることを示す。さらに、先行研究の背景的部分に関する問題を指摘し、本研究のとり立場を明らかにする。

#### 2.1 主要な指示詞研究

従来の指示詞研究は、大きく2つのグループに分けると整理しやすい。以下に節を分けてそれぞれのグループについて概観する。

## 2.1.1 伝統的指示詞研究

### 2.1.1.1 佐久間 (1951)

日本語の指示詞研究は、佐久間 (1951) から始まったと言っても過言ではない。佐久間は、それまで主流であった「距離区分説」ではなく、(1) に示すような、話し手 (一人称)、聞き手 (二人称)、それ以外 (三人称) という人称のなわばり (勢力範囲) によってコ・ソ・アを区別する「人称区分説」を採り、その後の指示詞研究の方向性を決定づけている。

- (1) コ：発言者・話し手の手のとどく範囲にあるものを指す。  
 ソ：話し相手の手のとどく範囲、自由に取れる区域内のものを指す。  
 ア：コ・ソの勢力圏外にあるものを指す。

佐久間は、現場指示に加えて、従来ほとんど区別されていなかった文脈指示的用法を見出した点で指示詞研究に大きく貢献しているものの、文脈指示については人称との関係を認めるに留まっていると言えよう。

### 2.1.1.2 久野 (1973)

文脈指示に関して、話し手と聞き手の知識を導入し、より詳細に考察した研究としては久野 (1973) が挙げられる。久野は、文脈指示のソ・ア系を (2) のように規定し、これにより (3) を説明する。

- (2) ア系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。  
 ソ系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。 (久野 1973: 185)
- (3) A：昨日山田さんという人に会いました。{その／\*あの} 人、道に迷っていたので助けてあげました。  
 B：{その／\*あの} 人、ひげをはやした中年の人でしょ。 (ibid.: 186 (一部抜粋))

(3) においてソ系列のみ使用可能なのは、A は、B が「山田」を知っているかどうか不確かであり、B も、A の言う「山田」が、B の知っている人かどうか不確かであることによるという。

文脈指示に話し手と聞き手の知識を導入することで佐久間よりも踏み込んだ研究であると言えるが、久野のソ系列の特徴づけに対して、後に黒田 (1979) によって反例が指摘される<sup>2</sup>。

### 2.1.1.3 黒田 (1979)

黒田 (1979) は、聞き手がない言語使用 (独り言) においても指示詞が使われ得ることを考慮し、「聞き手の知識」を含む久野の語用論的規定からの脱却を試みる。黒田は、指示詞

の用法を現場指示・文脈指示ではなく、「独立的用法・照応的用法<sup>3)</sup>」に分類し、(コ)・ソ・アを(4)のように規定する。これは久野の「知っている／知らない」を「直接的知識／概念的知識」に置き換えたものであり、独立的・照応的用法の両方に当てはまる。(5)、(6)に例を挙げる(黒田 1979: 47-49)。

- (4) ア系(およびコ系): 対象を自分の直接体験的知識として捉える。

ソ系: 対象を概念的に捉える。

- (5) a. (精密検査で発見された潰瘍について)  
 一体それはどんな色をしているのだろうか。(独立的用法)  
 b. 山田さんは田中先生とかいう人のことばかり話していたけれど、**その人**はそんなに偉い人なのだろうか。(照応的用法)
- (6) a. (潰瘍による胃の異常感を覚えて)  
 一体これはいつまで続くのだろう。(独立的用法)<sup>4)</sup>  
 b. (執筆を頼まれて、書くことを思いついて)  
 うん、まあ、**あのこと**でも書いてみるか。(独立的用法)  
 c. 今日山田さんに会ったけど、**あの人**と会ったのは一体何年ぶりのことだろう。(照応的用法)

(5)において、話者は「それ／その人」で指される対象を「検査で発見された潰瘍／山田さんが話していた田中先生」のように、概念的にしか理解していない。一方(6)の「これ」、「あのこと／あの人」は「異常感」、「特定の状況や思い出」を指しており、話者が直接経験したものである。

さらに、黒田は久野の規定に対する反例として(7)を挙げ、自身の論で説明している。

- (7) 昨日神田で火事があったよ。**あの**火事のことだから、人が何人も死んだと思うよ。

(黒田 1979: 55)<sup>5)</sup>

(7)において、聞き手は神田の火事を知らない。久野の規定では、話し手はソ系列を使用すべきであるが、「その火事」は明らかに非文である。一方、黒田の論では、『あの火事のことだから』という言外には『神田の火事』という概念だけからでは知り得ない話し手の直接的知識に基づいて、話し手が『人が死んだだろう』という推定を下している意が言外に含まれると説明される。

黒田は久野の提案した「知識」を、「直接的知識／概念的知識」としてより明確にし、独立的・照応的用法に対する統一的説明を試みている点で評価できる。問題としては、黒田自身も認めているようにコ系についてほとんど触れられていないこと、聞き手のいない状況での指示詞の用法が基本であり、対話における用法は二次的であるとする考えが妥当かということが挙げられる<sup>6)</sup>。

#### 2.1.1.4 田窪・金水 (1996)、金水 (1999)

言語形式の使用法の記述から「聞き手の知識」を排除するという黒田の考えをさらに発展させた研究としては、田窪・金水 (1996)、金水 (1999) が挙げられる<sup>7</sup>。メンタル・スペース理論を対話的談話に拡張した動的な談話理論 (談話管理理論) を基盤に、指示詞を記述した研究である<sup>8</sup>。

田窪・金水は話し手の心的領域 (= 知識) を二分割し、それぞれの知識を格納する領域を D-領域 (長期記憶とリンクされる)、I-領域 (一時的作業領域とリンクされる) と名づけている<sup>9</sup>。(8) は談話管理理論におけるア・ソ系列の規定であり、これによって (9) ~ (11) が説明される。

(8) ア系列: D-領域を探索範囲として、指示対象を検索せよという標識。(基本的に直示で、現場、記憶の中の直接指示できる要素とリンクされる。談話の中で呈示された属性以外の属性がアクセス可能。)

ソ系列: I-領域を探索範囲として、指示対象を検索せよという標識。(基本的に談話の中で呈示され、一時的記憶領域の要素とリンクされる。アクセスされる属性は、談話の中で呈示されたもの、および、それに自明な推論を経て得られる属性のみ。)

(9) A: こんど、新しい先生がくるそうよ。

B: {その/\*あの} 先生、独身? (金水 1999: 75)

(10) その人なら知っています。{その人/?あの}、花子さんと見合いした人でしょう。

(田窪・金水 1996: 70)

(11) その人なら知っています。{あの/?その} へんな人ですね。 (ibid.)

(9B) でア系列が使えないのは直接経験がないためである。また、(10)、(11) では同じ要素をソ・ア系列どちらの指示詞でも指すことが可能であるが、これも「談話中でのみ呈示された属性に言及するときはソ系列の指示詞を使い、記憶や現場で成立している属性にアクセスする場合は、ア系列の指示詞が用いられる」というように、やはり (8) の規定で説明できるという<sup>10</sup>。

田窪・金水は直示用法と文脈照応について統一的な説明を試みている点で評価できるが、庵 (2007: 33-37) が指摘するように、談話管理理論では文脈指示におけるソ系-ア系の対立を上手く説明できるものの、コ系-ソ系の対立に対しては有力ではないことが問題として挙げられる<sup>11</sup>。

#### 2.1.2 個別的な研究

2.1.1 節で挙げた研究は、(現在主流をなしているように見える) 一つの流れとして捉えられる。ここでは、それとは異なる方向性を提示している研究として、阪田 (1971)、李 (2002) を概観する。

### 2.1.2.1 阪田 (1971)

阪田 (1971) は、佐久間の「話し手のなわばり」「聞き手のなわばり」に加え、両者が対立しない「われわれのなわばり」を提案し、話し手が認識する領域を以下の二種類に分ける。

(A) 話し手自身を中心として考え、話し手自身の領域の中にあるものと外にあるものに分ける。

コ系：空間的・心理的に身近なもの（自己の領域内のもの）

ソ系：自己の領域外のもの

ア系：（外に表れていない）話し手の意識の中にあるもの

(B) 話し手は聞き手をも自分の領域内に包み込んで、「われわれ」という一つの領域をつくる。

コ系：「われわれ」の領域内に属するもの

ソ系：「われわれ」の領域外のもので、比較的近いもの

ア系：「われわれ」の領域外のもので、遠く離れたもの

まず (A) についてであるが、現場指示の場合、話し手と相手が対面している状況において、話し手の領域外と認めるものは相手により近いものであり、「聞き手のなわばり」に属するため、ソ系で指示される。文脈指示の場合、さらに「対話」と「文章」に下位分類される。

「対話」では、話し手の発言内容は自分の領域内としてコ系で、相手の発言内容は自分の領域外としてソ系で指示する。一方「文章」では、先行の叙述内容を主体的に捉えた場合は自分の領域内としてコ系で、客観的に捉えた場合は領域外としてソ系で指示すると阪田は説明する。ア系については、「過去を思い出して語るような場合に用いられ」、「主観の色合いを重加する」としている。

次は (B) である。現場指示は (B) の規定の通りである。文脈指示では、話し手、聞き手は共通の話題を通常ソ系で指示するが、主体的な意識で「われわれ」の身近なものと捉える場合にはコ系が使われ、特にその話題が両者の共通の知識であればア系が用いられると阪田は説明する。

阪田の論は、2.1.1 節で見た先行研究よりも現場指示や文脈指示を無理なく説明している点で評価できる。問題としては、(A) の規定には話し手に加えて聞き手がいる場合とない場合の二種類が含まれているにも関わらず、前者しか考察していないことや、(A) のア系は現場指示、文脈指示と別扱いしている一方、(B) のア系は文脈指示に含めているなど、細かい疑問点が残ることが挙げられる。

### 2.1.2.2 李 (2002)

阪田の研究を発展させた研究として、李 (2002) が挙げられる。李は、まず指示対象をめぐる話し手と聞き手の関係において、話し手が聞き手の視点をどう参照するかによって、両者の関係を (12) のように整理する<sup>12</sup>。さらに従来の現場指示・文脈指示ではなく、「知覚対象指示・概念対象指示」という分類を採用している<sup>13</sup>。(12) の規定とコ・ソ・アの関係は図

1 に図示される<sup>14</sup>。

(12) 対立関係：聞き手の視点を外在的に対立させる

融合関係：聞き手の視点が話し手に内面化され、同一化される

中立関係：聞き手の視点を同一化も対立化もしない

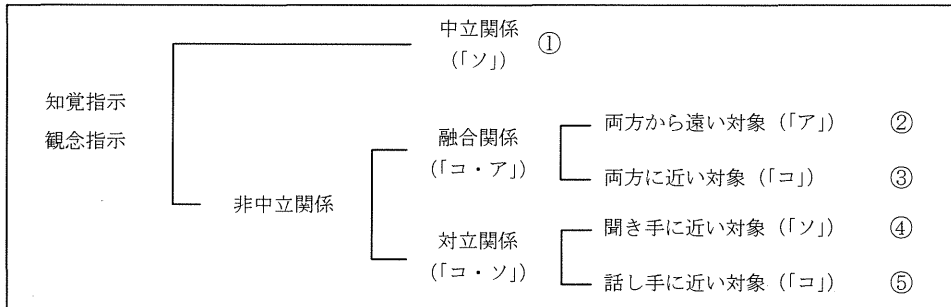


図1 (cf. 李 2002: 76, 103-104)

李の分類は、実際には図1よりも詳細であるため、ここでは従来の研究には見られない主張のみを指摘するに留めることとする。

李は観念指示のソ系に、従来指摘されているような聞き手が優位に関わるもの(図1の④)があることを認めつつ、聞き手では説明がつかない、ソ系が話し手自らの発言を承ける例の位置づけを試みている。この場合、話し手と聞き手は情報をめぐる共有関係において対等であることから、李は図1の①の「中立関係」のソ系を認めるに至る。そして、このような例と平行的な関係にあるものとして、知覚指示の「(タクシーの客が運転手に) そこの角を曲がってください」といった例を挙げている。このような例においてソ系を用いるのは、聞き手に近いという理由ではなく、話し手と聞き手の双方が優位に関わり得ない「中正・中立の領域」だからであると李は説明する。

李の研究は、従来の研究に比べてソ系を積極的に位置づけている点で評価できるが、問題点としては分類に終始している感が否めないことと、指示詞に中心的な用法、周辺的な用法があることを指摘しているものの、その関係が明確ではないということが挙げられる。

## 2.2 争点の整理

前節で概観したように、従来の研究はそれぞれ指示詞の規定に大きな差が見られる。少なくとも、コ・ア系については、現場指示・非現場指示(文脈指示を含む)の両方において「話し手の領域/話し手の近く」、「話し手の領域外/話し手から遠い」という基本的な規定が多く、多くの研究者に受け入れられているが、ソ系については、その意味・機能の規定に「聞き手」を含めるか否かで未だ見解が一致していないと言える。

先に見た先行研究と照らし合わせると、佐久間(1951)、久野(1973)は一貫してソ系を「聞き手」と結びつけて説明する一方、黒田(1979)、田窪・金水(1996)、金水(1999)は、ソ系、ひいては指示詞の意味規定から「聞き手」を排除しようと試みている。阪田(1971)、李

(2002) は、話し手の捉え方にいくつかの型を認めることで、「聞き手」が関係するものとそうでないものがあることを説明する、いわば折衷案と言える。この中では、阪田、李の論が最も無理なく現場指示・文脈指示を統一的に説明することができるが、なぜ「聞き手」が関わるものとそうでないものに同じソ系が用いられるのかが説明できないという問題が残る。

ソ系の扱いについては、金水・田窪(1992: 184-185)が指示詞に関する解決されるべき問題として指摘しているが(13)、現時点においてもこの問題が解決されているとは言い難い。

- (13) a. 現場指示における、ソ系列の位置づけ。ことに、人称区分と距離区分の統一的説明。  
b. 文脈指示における、各系列の位置づけ。ことに、聞き手の知識との関連において。  
c. 現場指示と文脈指示の統一的説明。

本研究では以上のような指示詞研究の現状を踏まえ、ソ系指示詞の本質を明確にし、特徴づけることが現段階で最も必要であると考え。そして、そうすることによってソ系だけでなく、コ・ソ・ア全体の現場指示と文脈指示の統一的説明への道が拓けるものと考え。

## 2.3 先行研究の背景とその問題点

2.1 節において主要な研究を概観し、問題点を指摘したが、個々の研究が抱える問題とは別に、指示詞研究全体にも本質的な問題があるように思われる。それは、言語体系の中に指示詞が位置づけられておらず、また、指示詞の本質とは何かが不明であるということである。

これまでの指示詞研究において、個々の研究が指示詞の本質をどのように捉え、記述・説明しているのかといった基本的な立場が議論の対象となることは稀であり、背景化されてきた。しかし、指示詞の本質をどのように捉えるかということは、何を記述・説明の中心に据えるかに影響を与える重要な点である。

先に概観した先行研究について言えば、指示詞に対する考え方により、2つに大別できる。1つは佐久間(1951)、阪田(1971)、久野(1973)、李(2002)を含むコミュニケーション的側面を指示詞の本質的な意味として組み込んでいる研究であり、もう1つは黒田(1979)、田窪・金水(1996)、金水(1999)を含む指示詞の機能におけるコミュニケーション的な側面を二次的なものと考え、そのような面と指示詞の機能を別々に記述しようとする研究である。

本研究を先に分けた2つの研究に位置づけるとすれば、前者に含まれる。つまり、コミュニケーション的側面が指示詞を考える上で必要不可欠なものだと考えるのである。後者が依拠する枠組みにおいて、コミュニケーション的な側面は語用論的なものとして指示詞本来の機能とは別のものとして考えられている。これは以下の引用からも明らかである。

- (14) 使用の際に現れる、話し手の聞き手の知識への配慮は、すべて語用論的な計算の効果によると考えられる。  
(田窪・金水 1996: 72)

ここでは、指示詞の機能は語用論的側面とは分離できるということが暗黙の前提とされている。しかし、このような立場に対しては、意味・機能の基盤は使用にあるとする立場からの批判もある(Langacker(1987)、山梨(2000)等)。本研究でもこの批判を支持し、黒田、



田窪・金水らの研究とは立場を異にする。

先にも述べた通り、本研究はコミュニケーション的側面を指示詞の本質的な意味に組み込んでいる佐久間（1951）、阪田（1971）、久野（1973）、李（2002）の研究と軌を一にするが、これら従来の枠組みは用いない。指示詞は他者とのコミュニケーションだけでなく、知覚、記憶、身体性などとも密接に関係する非常に多面的なものである（これは指示詞に限らず、言語全般についても同様に言えることである）。これらは全て言語の意味に関わることであり、これらの側面を総合して見ていかなければ指示詞の本質的な意味・機能を記述・説明することはできないと考えるからである。本研究は、このような立場から指示詞に関わる様々な側面との関係において指示詞を捉え、さらに言語現象の一部として指示詞を位置づけ、他の言語現象と指示詞がどのような関係にあるのかを示すことを目標としている。このような包括的な視点から指示詞を扱うには、従来の枠組みでは限界があると言わざるを得ない。従来の枠組みは狭い意味での言語の記述が中心であり、言語の意味に密接に関わる言語外の要素は付加的な扱いを受けてきた。本研究では、従来の枠組みでは必ずしも重要な要素として扱われてこなかった（狭い意味での）言語以外の要素も、言語と同等に重要な価値を持つものであると考える。このように、言語をそれが使用される環境の中に位置づけ、総体的に扱うことのできる枠組みとして認知言語学の枠組みを提示し、指示詞を記述・分析していく。

### 3. 理論的枠組み

#### 3.1 理論的枠組みの導入

前章で概観した黒田（1979）、田窪・金水（1996）、金水（1999）がとるアプローチは、より一般的に「計算主義的」なアプローチとして捉えることができる（生成文法に代表されるこのアプローチの本質的な問題点については、山梨（2000）等を参照）。

本研究が依拠する認知言語学のアプローチは、計算主義的アプローチとは対照的に、コミュニケーションこそが言語の第一義的な役割であると考え、いわゆる言語能力に関わる知識は人間の一般的な認知能力の発現であるという視点に立つ。また、生成文法が「余分なもの」として扱う狭い意味での言語外的な要素（文脈、場面、使用者など）は、言語と不可分な関係を持つものとして捉えられる。したがって、意味論と語用論は密接に相互作用しながら協同して働くものであり、明確に分離されるものではないと考える（Langacker 1987, 1991, 2008）。

#### 3.2 指示詞の認知的基盤

指示詞の記述に関しては、これまでの数多くの研究による蓄積が認められる。しかし、(13c)に示された指示詞の統一的説明に関する問題を解決するために現段階で必要なのは、引き続き指示詞の記述を行うと同時に、その説明についてさらに議論することであると本研究は考える。そして、従来の研究ではあまり重視されてこなかった「指示詞の本質とは何であるか」ということが、指示詞に対する説明の前提となる部分であり、同様に議論されなければならない点である<sup>15</sup>。

先に導入した認知言語学の枠組みに基づいて指示詞を扱っている研究として、高橋（2004）、

新村・ハヤシ(2008)等が挙げられるが、どちらも指示詞が「指し示す」ものであるということをも前提に議論を進めており、やはり「指示詞の本質とは何であるか」という根本的な問題についての検討は不十分である。加えて、認知言語学における指示詞研究は英語が中心となっており、日本語指示詞の分析はほとんど手付かずの状態にある。

### 3.2.1 「指し示す」ということ

認知言語学の枠組みに基づく指示詞研究だけでなく、従来の多くの指示詞研究においても、指示詞は単純に「指し示す」ものとされてきた。本節ではこの「指し示す」行為がどのような状況下で何のために行われるのかという点から指示詞を捉え直してみたい。

「指し示す」ということを考えるとき、まず考えなければならないのはコミュニケーションの場面である。子供の発達過程を見ると、言語以前に指差しや視線による「指し示し」が行われており、言語を学ぶにつれて、言語による「指し示し」が行われるようになる。「指し示し」という行為は、相手が存在して初めて行われるものなのである。コミュニケーションの場を考慮に入れずに指示詞の本質的な意味を記述することなど不可能である。よって、指示詞の意味・機能からコミュニケーション的な側面を分離する黒田(1979)や田窪・金水(1996)、金水(1999)などのアプローチは指示詞の機能の重要な部分を捉えそこなう危険性を孕んでいると言わざるを得ない。

本研究では「指し示す」ということを考えるにあたって、共同注意(joint attention)の概念を取り入れ、指示詞の捉え直しを試みる。なお、共同注意の概念を指示詞に取り入れた研究としてはDiessel(2006)が挙げられるが、Diesselは共同注意の概念が指示詞以外の言語現象においても観察される点については認めているものの、指示詞以外の具体的な事例についての記述は行っていない。本研究では共同注意の関わるほかの事例も含むより広い言語現象の一部として指示詞を位置づけ、分析を行っていく。

### 3.2.2 共同注意

共同注意とは、主に発達心理学や認知心理学で研究されており、言語獲得とも非常に関連が深いとされる現象である(cf. Tomasello 1999、大藪 2004)<sup>16</sup>。

共同注意が発現するのは生後9か月から12か月ごろである。それ以前は対人、あるいは対物という二項的であった関係が、ある時期から、主体である子供と物体、そして人との関わり合いという三項的な関係へと発達する。そこから生じるのが、子供と大人と、両者が注意を向ける物体ないし事象とで構成される指示の三角形であり、これが「共同注意」である(Tomasello 1999)。Tomaselloによると、子供がこのような共同注意的な相互交渉を始めるのは、他者を自分と同じように意図を持つ主体であると理解しはじめるときであるという。

このような共同注意の発現とほぼ同時期に、子供は指差しなどによって能動的にある対象に大人の注意と行動を向けようとし始める。この指差しは、相手に働きかけることによって対象物を手に入れようとする「命令的(imperative)」なものと、相手との注意の共有それ自体を求める「叙述的(declarative)」なものの二種類に分けられる。

### 3.2.3 共同注意と言語表現

共同注意が言語に関わる側面について言えば、子供は共同注意の助けを借りて言語を学び、指差しや視線によって共同注意を確立させるだけでなく、言語によっても能動的に共同注意を得ることを学んでいく。Diessel (2006) によれば、共同注意を協調させるのに用いられる言語的手段として、指示詞はどこの機能と密接に結びついているものはないという (ibid.: 469)。本研究は Diessel の主張を支持し、共同注意を指示詞の認知的基盤であると同時に指示詞の機能とも密接に関係するものとして位置づける。

しかし、共同注意を成立させるという機能は指示詞だけが持っているのではなく、指示表現 (referential expression) 一般が持つものである。この指示表現には、代名詞、指示詞、固有名詞、定冠詞や指示詞や修飾語付きの普通名詞などが含まれる (Chafe 1994)。指示詞とその他の指示表現の違いは、指示対象の同定という聞き手が関わる側面に注目すると、本研究では次のように捉えられる。例えば、「{この本／これ} 一日だけ貸してくれない？」という発話を聞いたとき、「この本」の場合、「本」という普通名詞により、現場の状況を見るなどの文脈によらずとも性質や形状に関してある程度具体的に概念化することが可能である。一方、「これ」の場合、示されるのは「話し手の近く」といった意味だけであり、この表現が指示する具体的な概念を喚起することは発話の現場という文脈の助けなしには不可能である。その結果、聞き手の注意は指示対象に対してより強く向けられることとなる。このことから、指示詞が共同注意と密接に結びついたものであることが分かる。

### 3.3 本研究における指示詞の特徴づけ

以上で示した見解を総合し、本研究では指示詞の機能を以下のように規定する。

#### (15) 指示詞の機能:

話し手が既に注意を向けている対象に、聞き手の注意を向ける (= 共同注意を成立させる) ための指令であると同時に、その対象に対する話し手の物理的・心的距離を伝える<sup>17)</sup>。(ただし、指示対象の候補が多い視覚的な対象の場合、指差し、視線等も必要となる。)

(15) は、指示詞一般に共通する機能である (コ・ソ・アそれぞれについてさらに詳細に規定する必要があるが、この点は今後の課題とする)。(15) に示した指示詞の機能は、簡略化した Current Discourse Space (CDS; Langacker 2001) を用いて以下のように図示できる。

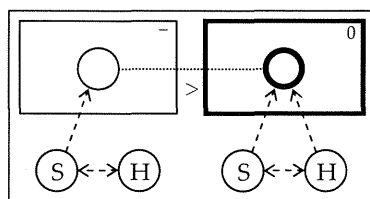


図 2

指示詞はマイナス・フレーム(図2の左側の四角)と焦点フレーム(右側の太線の四角)の関係で捉えられる。図2において、話し手(S)と聞き手(H)から対象に向かう破線矢印と、両者の間の破線矢印は、矢印の向かう方向に参与者の注意が向いているということを示している。マイナス・フレーム、焦点フレームにおける対象(○で示されている)間の点線は、その同一性を示している。図2には、指示詞が、話し手のみが注意を向けていた対象に聞き手の注意を向けさせるという機能を持つものであることが示されている。

さらに、従来の多くの研究では明確に規定されていない「指示性」については、本研究では以下のように規定する。(「指示」という行為を聞き手の存在を前提として初めて行われるものであると捉えるため、本研究では指示性そのものに話し手、聞き手の存在を認める。)

(16) 指示性:

話し手がどの程度、聞き手の注意をある対象に向けようとしているかの度合い。

次章では、以上に示した本研究の言語観と指示詞の特徴づけを土台にし、日本語における指示詞研究の最大の争点であるソ系指示詞に焦点を当てた分析を行う。

## 4. 事例分析 I

第2章において、日本語の指示詞研究における最大の争点がソ系指示詞であることを既に指摘した。本章では、特に「そんなに」という表現に焦点を当て、ソ系指示詞の指示対象にどのようなものがあるのかを分類し、その意味を探っていく。

### 4.1 考察対象

具体的な分類・分析に入る前に、本稿において「そんなに」という表現に焦点を当てて考察を進める理由をここで明らかにしておく。

コ・ソ・アという指示形態素は、現代日本語において単独では用いられない。そのため、指示詞を研究する際、指示詞を含んだ様々な表現からコ・ソ・アそれぞれの系列の指示詞の意味を抽出するということが行われる。しかし、表現形式を限定せずにコ・ソ・ア全体の事例を観察する場合、性質が均質でないものを比較せざるを得ず、その比較が困難かつ妥当性を欠くものになる可能性がある。また、必要以上に意味を抽象化してしまう恐れもある。本研究ではこのような事態を避け、ソ系指示詞の意味をボトムアップ的に明らかにするため、扱う形式を限定する。

さらに、「{こ／そ／あ} んなに」という形式を選択した理由は次の2点である。

まず1点目は、後続する品詞に関わらず、「{こ／そ／あ} んなに」が程度評価を表すという理由である<sup>18</sup>。これが「{こ／そ／あ} んなに」から「に」を除いた「{こ／そ／あ} んな」になると、(17)に示すように、「{こ／そ／あ} んなに」ほど均質ではなくなる。

(17) a. {こ／そ／あ} んな本は読むな。(「ものの属性」(高橋 1990))

b. {こ／そ／あ} んなひどいことを言われたら、泣いてしまう。(ものの属性、程度評

価)

- c. この本は {こ／そ／あ} んな高くないよ。(「{こ／そ／あ} んなに」の縮約?)

本稿では議論の簡略化のため、少なくとも後続する語彙に関する程度評価という点においては共通している「{こ／そ／あ} んなに」という表現に注目する<sup>19</sup>。

2 点目として、語法研究的な貢献が見込めることが挙げられる。「{こ／そ／あ} んなに」のうちソ系指示詞を含む「そんなに」は、否定を伴うと指示性が喪失するという指摘がなされているものの(井上 1992、林 1999)、例外として位置づけられるに留まり、考察の対象とされてこなかった。当然、指示性のある「そんなに」との関係は明らかにされていない。本研究はこのような「指示性の喪失」が関わる「そんなに」を例外として考察の対象外とするのではなく、指示性のある「そんなに」との関係を明らかにすることを試みる。

以上の理由から、本稿では「そんなに」に焦点を絞って考察していく。先に述べた「指示性の喪失」について補足しておく、これは「そんなに」に限って見られる現象ではない。指示対象が不明な例は、ソ系指示詞全般に見られるものである(「さほど」「それ行け!」「それ見ろ」等)。よって、「指示性の喪失」は単なる例外として片付けられるべきものではなく、ソ系指示詞の全体像を明らかにする上で避けては通れない問題であると言える。本研究は、指示詞研究の争点となっているソ系指示詞の意味・機能を明らかにするために、「指示性を喪失」したソ系指示詞の内実を明らかにする必要があると考える。このような観点に立つと、「そんなに」の分析は、単なる語法研究に留まるものではなく、「指示性を喪失」したソ系指示詞の事例研究として位置づけることができる。

#### 4.2 従来の説明とその問題点

指示詞の観点からの研究としては、否定を伴わない「こ(そ・あ) んなに」を考察している井上(1992)が挙げられる。ここでは「そんなに」に関する議論を概観する。

井上は(18)の制約を設定し、(19)の容認度の差を説明する。

- (18) 「ソンナニ」が「聞き手が関与する事態」を指示する場合、「ソンナニ」によって提示される情報は「聞き手が知っている」「聞き手によって提供された」情報でなければならない。  
(*ibid.*: 20)

- (19) a. 君、食べるのが遅いなあ。そんなに遅いと置いていくぞ。  
b. 君、シャツは汚していないと言ってたけれど、そんなに汚れているじゃないか。  
c. ??君は食べるのがそんなに遅いんだよ。(cf. 君は食べるのが遅いんだよ。)  
d. ??君、そんなにシャツが汚れているよ。(cf. 君、シャツが汚れているよ。)

(*ibid.*: 19-20)

井上の説明によると、(19a, b)が自然なのは『「現在聞き手が食べるのが遅い／現在聞き手のシャツがかなり汚れている』という聞き手が関与する一回的・個別的な事態に関する情報が聞き手によって(意図的・非意図的に)提示されており、話し手はその情報を受信し、自

分の情報とした上で「ソソナニ」で指示している」(ibid.:20) ためである。一方(19c, d)が不自然なのは、「終助詞『ヨ』」が用いられていることからわかるように、基本的に、聞き手が関与する事態の程度を『ソソナニ』で指示して聞き手に知らせるという文(ibid.)であり、(18)に違反するためであると説明する。

井上の問題点としては、(i) いわゆる現場指示の例しか考察していない、(ii) 「聞き手が関与する事態」とは言えないような状況において使われる「ソソナニ」については何も述べていない、(iii) そもそも「聞き手の関与」という用語は、聞き手が具体的にどのような形で指示詞の選択に影響を与えているかが明確ではなく、何らかの形で聞き手がその場面、状況、文脈に参与していれば全て「聞き手の関与」と言ってしまう、という3点が挙げられる。とりわけ(iii)については、

#### (20) 聞き手の関与：

(現場指示であれ文脈指示であれ) 話者だけでなく聞き手も含む両者を基準とした位置関係の中で指示対象がどこに存在しているか。

という形でより具体的に規定する必要がある、以下、本研究で「聞き手の関与」と言う場合は(20)の意味で使用する。

以上のような問題点は見られるものの、井上の主張は指示詞(特にソ系指示詞)の意味規定にコミュニケーション的側面を含める(つまり指示詞の意味規定から「聞き手」を排除しない)という点で本研究の立場に合致するものである。

### 4.3 本研究における分類と分析

本節では「ソソナニ」の事例を、「聞き手の関与」を軸として分類・分析していく。黒田(1979)や田窪・金水(1996)、金水(1999)などの研究が指示詞(特にソ系指示詞)の意味・機能の規定から「聞き手」という概念を排除するのは、彼らが計算主義的な観点に立っていることに加え、いわゆる文脈指示を説明する際に「聞き手」という概念が邪魔になる場合があると考えるためであると言える。現場指示において、ソ系指示詞と「聞き手」には密接な関係が認められるものの、文脈指示(特に、聞き手の関わらない独話例)になるとその関係は不明確なものとなり、現場指示と文脈指示の統一的説明の際に都合が悪い。それゆえ、指示詞の意味・機能から「聞き手」を排除するに至ったと考えられる。これに対して、本研究では時間軸に沿った談話の流れの中で情報が共有されていく過程を考慮することにより、「聞き手」という概念を保持したままでも現場指示と文脈指示の統一的説明が可能であることを示す(これによって、前節で指摘した井上の問題点(i)、(ii)を解決する)。

本稿では対話例を中心に分析を進める。言語は対人的行為であるコミュニケーションばかりでなく、個人で達成する思考のような行為にも用いられるが、本研究はこれを言語の副次的な機能として位置づけるためである。さらに、指示詞を考える場合、視線やジェスチャーといった要素も含めて観察できるような資料を用いるのが理想であるが、現段階ではそのような資料は限られていて使用が難しいため、この点については今後の課題とし、実際の会話に近いと思われるドラマのシナリオ等の対話を中心に使用することとする<sup>20</sup>。なお、説明に

際して、当該のコミュニケーションに関与している参加者のうち、「そんなに」を含む発話をした者を話し手、それ以外を聞き手として言及する。

#### 4.3.1 (A)「聞き手の関与」が明確なもの

まず、「そんなに」の指示対象における聞き手の関与が明確なものから見ていく。狭い意味での言語以外の要素を指すものと、狭い意味での言語内の要素を指すものに大別できる。

(21)の「そんなに」は聞き手の「じっと見ている」様子の程度を指しており、(22)では、聞き手の「慌てている」様子の程度を指している。

- (21) ひまわり： ちょっとッ！  
 しのぶ： は、何？  
 ひまわり： さっきからさア、なんで私の顔をジッと見てるのよ。オカマがそんなに珍しいの？ (土曜ドラマ館「スッポカしちまった悲しみに」)
- (22) 新人： 先輩、そんなに慌てていったい何が起こったんですか？  
 オカマ： 事件よ、クレーム対策課始まって以来の大事件。  
 (土曜ドラマ館「クレーム対策課」)

以上の例において、指示対象は先行文脈の中には存在せず、視覚または聴覚などによって知覚される、発話の現場の中に存在している聞き手の様子である。仮に話者が目や耳で現場の状況を把握できない場合、「そんなに」という発話は不可能であろう。

次の例を見てみよう。

- (23) [一郎と花子は夫婦であるが、兄妹と偽って漫才をしている。]  
 一郎： 兄弟ブームは、あと1、2年は続く。その後でカミングアウトして、今度は夫婦漫才に衣替えをすればいい。  
 花子： そんなに待てないの！ (土曜ドラマ館「うそつきは漫才のはじまり」)
- (24) 兎： で、ここは何処？  
 寅： 私にもよく分かりませんが、あなたがこの車に乗り込んだ場所から、エエト、350キロ離れた所です。  
 兎： そんなに走ったの？  
 寅： はい、結構しぶとい人達でしたから。 (土曜ドラマ館「兎の決断」)

(23)における「そんなに」の指示対象は聞き手の「1、2年」という発話であり、(24)では聞き手が述べた距離である。これらはいずれも聞き手の発話に含まれる数量的な面を程度として指した表現である。これらの例では指示対象は先行文脈の中に存在し、例えば電話で話しているなど、話者が現場の状況を把握できない場合でも指示は可能である。

言い換えれば、(21)、(22)の例では指示対象は五感によって直接知覚可能な事象であるの

に対し、(23)、(24)の例における指示対象は言語という恣意的な記号を媒介として話者の心の中に喚起されるイメージである。

ここまで見た事例は、「そんなに」の指す情報が狭い意味での言語の外部にあるか内部にあるかという違いはあるものの、どちらも聞き手の様子や聞き手の発信した情報に関わる事象の程度を指しており、「聞き手の関与」が明確である。

次の例はこれまでの例と異なり、一見したところ「聞き手の関与」は見られない。

- (25) メニューの〈今夜のスペシャル〉というコーナーに、僕はアンチテーゼの料理をみつけた。「ノルマンディー風新鮮アンチテーゼのガーリック・ソースかけ」とある。

「このアンチテーゼだけど、本当にそんなに新鮮なんですか？」と僕はメニューをにらみながら給仕頭に質問してみた。

「ええ、それはもう間違いございません」と給仕頭はそんなこと訊かれて心外といった声で答えた。  
(村上春樹・糸井重里『夢で会いましょう』)

(25)の「そんなに」は、メニューに書かれた「新鮮さ」の程度を指しており、聞き手は関わらないように思える。しかし、聞き手である給仕頭は、メニューを書いたレストラン側に属する人間である。レストランが発信した情報が、「僕」によってメトニミー的に聞き手(給仕頭)が発信した情報として解釈され、「そんなに」が間接的に聞き手によって発信された情報を指しているのである。したがって、(25)においても「聞き手の関与」が認められる。

#### 4.3.2 (B)「共有」という関与

以上の例は、聞き手の様子や聞き手の発信した情報に関わる事象の程度を指しており、「聞き手の関与」が比較的明確に認められるものを指示していた。では次の例はどうだろうか。

- (26) [たこ焼き屋で、AとBがたこ焼きを食べている。同じくたこ焼きを食べている他の客が「ここのたこ焼き、すごく美味しいなあ」と言っているのが聞こえて、AがBに言う。]

A:そんなに美味しくないよね…。

B:うん…。

(26)は作例である。「そんなに」で指されているのは、聞き手の発話でも話し手の発話でもなく他の客の発話である。「ここのたこ焼き、すごく美味しいね」という他の客の発話を、聞き手も同様に聞いていると話し手が考えていることは、話し手が終助詞「ネ」を用いて聞き手に同意を求めていることから分かる。

この例は、話し手と聞き手に「共有」されている情報を指しているという点で「聞き手の関与」が認められる。しかし、聞き手に付随する様子や聞き手によって発信された情報に関わる事象の程度を指すものであった(21)～(25)に比べると(26)には聞き手の積極的な関与は認められない。この点で(26)はこれまでの例とは異なるものであると言える。

次の例は、黒田(1979)や田窪・金水(1996)などにおいて聞き手が関わらないという点



で文脈指示の典型であるとされてきたものに非常に近い例である。

- (27) おそらくあのカツはご飯込みの定食で 1100kcal 前後だろうな。一日 1500kcal だから、一食でそんなに食べたら残りは 400kcal かあ。あきらめるしかないか。

([http://putikuri.way-nifty.com/blog/2007/04/post\\_9642.html](http://putikuri.way-nifty.com/blog/2007/04/post_9642.html))

(27) の「そんなに」は、「こんなに」で置き換えることが可能である。「こんなに」の場合、読み手<sup>21</sup>は自分の存在を無視して独り言を言われているような印象を受けるのに対し、「そんなに」の場合はそのような印象は受けない。このことから、(27) のような例にも聞き手が何らかの形で関わっていることが分かる。具体的に言えば、第一文の発話が終わった時点で読み手はその内容を了解し、発話内容における情報を共有していると考えることができる（厳密に言えば、本研究では談話における理解は文単位ではなく Intonation Unit (IU; Chafe 1994)（≒節）単位でなされていると考える）。そうすると「そんなに」は既に読み手に共有されている情報である「1100kcal」という数値を指していることになり、(27) の「そんなに」は (26) と同様に聞き手（読み手）に共有されている情報を指しているという点で「聞き手の関与」が認められると言える。

#### 4.3.3 (C) その他の例

以上で見た (21) ～ (27) の例は、「そんなに」が指示するものが発話の現場や先行文脈に認められるものなど様ではなかったが、全て指示対象が「そんなに」を含む発話に先行して認められるものであった。しかし以下に挙げる例は、発話の現場にも先行文脈にも指示対象が認められない。

- (28) [ヒトミは妊娠中。ボウヤはヒトミのお腹の中にいる赤ちゃん。ヒトミにはボウヤの声は聞こえていない。]

ヒトミ： はあ、やつと静かになった。寝ちゃったかな？ んー、でも考えてみると、この子、キヨシの子供っていう可能性もないわけじゃないのよね。マ、そこんところが救いって言えば救いかな、ハハハ。

ボウヤ： そんなどこに救いを求めてどうすんだ。

ヒトミ： なんだかんだ言っても、いいひとだもんね、キヨシは。そりゃ顔はとりたててハンサムでもないし、背もそんなに高くないし、一流大学出てるわけでも、一流企業に勤めてるわけでもない。といって、実家が金持ちってこともないし。  
(土曜ドラマ館「消し忘れた記憶」)

ソ系指示詞は言語的な先行文脈からフレーム的知識と推論によって導入された対象を指すことができるという指摘がなされているが（山梨 1992、金水 1999）、(28) における「そんなに」はそのようなフレーム知識と推論によって生じた対象を指しているのではない。この例の「そんなに」が何かを指しているとするならば、それは「一般に『背が高い』とされる男性の身長」といったものであろう。(21) ～ (27) で見た例とは異なり、(28) の「そんなに」

が指示するものは発話の現場にも先行文脈にも存在していない。

次の例も同様である。

- (29) 我々が何もかもをそれぞれの巨大な穴の中に放りこんだところで、シェフがあいさつにやってきた。非常に満足したと我々は彼に言った。

「これだけ召しあがっていただけると、我々としても作りがいがあるというものです」とその料理人は言った。「イタリアでもこれだけ召しあがれる方はそんなにはいらっしゃいません」

「どうもありがとうございます」と私は言った。

（村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』）

(28)、(29) はどちらも否定を伴うものであり、従来の研究において「指示性を喪失」した例であるとされてきたものに当たると考えることができる（井上 1992、林 1999）。

#### 4.3.4 考察

指示している対象が発話の現場や先行文脈に認められない指示性の低い (C) についてはひとまず保留とし、(A)、(B) を「聞き手優位」、「コンテキスト」、「共有」という3つの基準で整理する。まず、これら3つの基準について説明する。

「聞き手優位」という基準は、「そんなに」が聞き手の様子や聞き手の発信した情報に関わる事象（聞き手優位の事象）の程度を指しているかどうかを表している。2 つ目の「コンテキスト」という基準は、指示対象が発話の現場や先行文脈といったコンテキストに認められるかどうかに関わるものである。最後に「共有」という基準は、指示対象が話し手と聞き手に共有されているかどうかに関わるものである。なお、「共有」という基準は話し手と聞き手のどちらかが優位に関わるものではないものとする。それゆえ「聞き手優位」基準と「共有」基準は互いに排他的なものである。

以上の基準で事例を整理したものが以下の表である（○は基準を満たしているもの、－は基準を満たしていないものであることを示す）。

表 1

分類	(A)	(B)	(C)
聞き手優位	○	－	?
コンテキスト	○	○	?
共有	－	○	?

(A) の事例は、どれも聞き手の様子や聞き手の発信した発話の内容、つまり「聞き手側の事象」を指していると言える。(B) は言語内の要素を指しているが、(A) とは異なり、聞き手が発信した情報ではない。聞き手と話し手によって指示対象が共有されている事例である。

「聞き手優位」にせよ「共有」にせよ、いずれにしても聞き手の存在が「そんなに」という

表現に深く関わっており、聞き手という要素を無視してこれらの事例を分析することは適切であるとは思われない。

ここで保留にしていた (C) について考えてみると、(C) は指示対象が発話の現場にも先行文脈にも存在せず、指示詞としては周辺に位置づけられるものである。加えて、指示詞という側面よりも否定を緩和する表現（緩和表現）としての側面が強いように思われる。このことは、辞書や文法書において「そんなに」が「(下に打ち消しの語を伴って) 程度が思ったほどでないさま」(『大辞林』より) と説明されたり、「否定を伴って程度の甚だしくないことを表す」(益岡・田窪 1992) 程度副詞として分類されたりしていることから分かる<sup>22</sup>。

「否定を伴って程度の甚だしくないことを表す」という意味についてさらに言えば、益岡・田窪 (1992) は「あ(ん)まり」もこの意味を表すとして「そんなに」と同様に分類している。(C) に分類した「そんなに」の事例は「あ(ん)まり」で置き換えることが可能であり、確かに「そんなに」と「あ(ん)まり」は類似した意味を表していると考えることができる。

しかし、形式が異なれば(広い意味での)意味も異なるというのが認知言語学における基本的テーゼのひとつであり(cf. 辻(編) 2002)、「そんなに」と「あ(ん)まり」が全く同じ意味を表すものではないことは明らかである。両者は非常に類似した意味を表すが、「そんなに」は指示性が低いながらも指示詞を含むのに対し、「あ(ん)まり」は指示詞を含まないという違いがある。この違いが表現の意味にどのように反映されているのかが分かれば、指示性の低い (C) のような「そんなに」の性質が明らかになるのではないだろうか。そして、これはソ系指示詞全般に見られる「指示性の喪失」という現象の内実を明らかにする手掛かりとなるはずである。次章では、「そんなに」と「あ(ん)まり」の比較対照を通して「そんなに」、ひいては指示性の低い、「指示性を喪失」したソ系指示詞の性質を探っていく。

## 5. 事例分析Ⅱ

### 5.1 比較対照と対照分析の意義

対照分析を行う前に、「そんなに」と「あ(ん)まり」という表現について補足しておく。

指示性の低い「そんなに」が見られるのは否定を伴う場合に限られることから、本章では否定を伴う「そんなに～ない」を分析の対象とする。もちろん、否定を伴う全ての事例において指示性が低いわけではない。これは、前章で挙げた (23) のように、否定を伴うが指示性の高い事例が見られたことから確認される。よって、指示性の低い「そんなに～ない」は、否定を伴う(指示性の高い用法も低い用法も全て含めた)「そんなに～ない」全体の中の一部として位置づけられる。

次に「あ(ん)まり」について補足しておく。「あんまり」は「あまり」に撥音が添加された形式であるが、本研究では両者を「あんまり」で代表させる<sup>23</sup>。これは、本章で対照分析を行うことを考慮すると、文の容認度に影響を与える要因を最小限にすることが望ましいためである。「そんなに」と「あんまり」は、音韻的に共通する部分が多く類似性が高い。さらに、口語的な表現であることも共通している。もちろん、「あまり」と「あんまり」の意味・機能は等価ではない(須賀(1992)等を参照)が、どちらも否定を伴う程度評価という側面においてはほぼ等価であることから、本稿では「あまり」と「あんまり」を特に区別しない。

さらに、対照分析を行う意義について述べる。前章でも触れたように、「そんなに～ない」と「あんまり～ない」はどちらも程度評価を表す表現である。(30)に示すように、「そんなに」でも「あんまり」でも意味はほとんど同じであることから、両者が類似した意味を表すことが確認できる。

- (30) a. {そんなに／あんまり} 美味しくない。  
b. 飲み会で5000円は {そんなに／あんまり} 安くない。

しかし、(30)に「私にとっては美味しい／学生にとって」という表現を付加した(31)、(32)では一方が不自然となっており、その意味・用法には違いがあることが分かる。

- (31) a. そんなに美味しくないけど、私にとっては美味しい。  
b. ??あんまり美味しくないけど、私にとっては美味しい。  
(32) a. 学生にとって、飲み会で5000円はそんなに安くない。  
b. ??学生にとって、飲み会で5000円はあんまり安くない。

本研究では、「そんなに」と「あんまり」の違いが指示詞を含むか否かに起因するものであると考える。本章において「そんなに」を単独で分析するのではなく、「あまり」という比較対象を設定し分析を行うのは、「程度評価を表す」という意味においては類似しているが、指示詞を含むか否かでは相違するこれらの表現を比較することにより、指示性の低い「そんなに」の性質がより明らかになると考えるためである。

## 5.2 従来の説明とその問題点

「そんなに～ない」と「あんまり～ない」を比較した研究は見られないが、比較的近い研究として、「アマリ～ナイ」と「サホド(ソレホド)～ナイ」の比較を行っている服部(1994)と、否定を伴う「それほど(さほど)」について考察している岡崎(2006)を概観する<sup>24</sup>。

### 5.2.1 服部(1994)

服部は、アマリ～ナイとサホド(ソレホド)～ナイは、程度が大きくないことを表すという点で共通するが、その背景にある関心は以下のような違いがあるとする。

- (33) アマリPナイ：  
事態をある方向に向かって計った値の大きさへの関心が存在する。(Pが形容詞などの何らかの尺度を反映した表現である場合、Pは「正方向」と捉えられる述語でなければならない。)  
サホド(ソレホド)Pナイ：  
事態の程度がある程度xに達することへの関心が存在する。(xはPという表現から自然に関心が持たれるような、Pに関して何らかの意味で有意味な程度であり、いわ



- (37) 発話者は先行する言語文脈「横浜の中華料理店 K」から、活性化された一般知識領域の情報「(これまで来たことはないが、世間の噂では) 中華料理店 K は有名な高級店」、さらにスキーマ「高級な中華料理の味」を参照、推論した結果「予測していた高級中華料理店の味」を対象とし指示を行っている。(ibid.: 84-85)

岡崎は、「否定対極表現には必ずスキーマが必要であり、(中略) 直前または同一の言語文脈に依拠した指示ではない」(ibid.: 85) と説明するが、これは「あんまり～ない」にも当てはまるように思われる。例えば、(36) の「それほど(さほど)」を「あんまり」に変えても意味はほとんど変わらない(38)。

- (38) 昨日、横浜の中華料理店 K に行ったよ。でも、あんまりおいしくなかった。(cf. (36))

岡崎は指示詞を含んだ表現のみを考察の対象としており、これは岡崎の主張の本質的な問題点ではない。しかし指示詞を扱う限り、指示詞を含んでいることがその表現の意味にどのように影響しているのかは明らかにされるべきものであると本研究は考える。

### 5.3 本研究の枠組みでの分析

#### 5.3.1 程度評価を行う背景

本稿で扱う「そんなに～ない」と「あんまり～ない」について具体的に論じる前に、これらの表現が発話される背景に関して2点指摘しておく。

まず1点目は否定についてである。本稿で扱う2つの表現は、どちらも否定を含むという点で共通している。否定は何らかの先行文脈を前提として初めて自然となる(森田(2002)等)ことから、「そんなに～ない」と「あんまり～ない」という表現においても前提との関連で論じることが不可欠であると考えられる。

2点目は程度についてである。従来の研究でも指摘されてきたように、「そんなに～ない」と「あんまり～ない」はどちらも程度が甚だしくないことを表す表現である。この「程度」をさらに分解して考えてみると、ある対象の程度を述べるには、何らかの基準との比較が必要であることが分かる。「程度が甚だしくない」ことを捉える背景には、何らかの基準との比較により、対象がその基準よりも下に位置づけられるということが含まれるのである。これは以下のように図示できる。

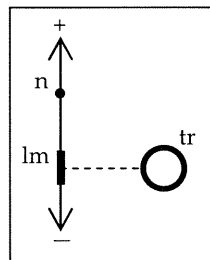


図3

図3について説明しておく、プラス(+)、マイナス(-)の方向を持つ矢印が評価軸を、黒丸で示した n (norm) が評価基準を、○で示した tr (trajector) が評価対象を表す。この図は、評価基準 n よりも下の、ある部分 lm (landmark) に評価対象が位置づけられることを示しており、言葉の背後に存在する比較という主体の認知プロセスを反映したものである。

本稿では、「程度」を述べるということの内実を、以上に見たような、主体が関わる比較の認知プロセスとして捉えられるものとして位置づける。

### 5.3.2 参照する基準について

「そんなに～ない」と「あんまり～ない」が、どちらも基準との比較という認知行為が含まれていることは先に述べた。本研究では、これらの表現が何らかの前提を基準として参照し、程度評価を行っていると考ええる。さらに、この「基準」に着目し、「そんなに～ない」と「あんまり～ない」の違いが「参照する基準の違い」にあると主張する。

先に指摘した2点を考慮し、以下において、「そんなに～ない」と「あんまり～ない」がそれぞれ何を前提(=基準)とするかにおいて違いが見られることを明らかにする。

### 5.3.3 「あんまり～ない」が参照する基準

まず、「あんまり～ない」を見ていく。「あんまり～ない」は、「私にとって、あんまり～ない」である。これは、(39)の「私にとって」の部分を(40)のように他者に変えると、文が不自然になることから明らかである。

(39) 私にとって、飲み会で5000円は{あんまり／そんなに}安くない。

(cf. 飲み会で5000円は{あんまり／そんなに}安くない。)

(40) 学生にとって、飲み会で5000円は{??あんまり／そんなに}安くない。(=(32))

仮に(40)の「あんまり」を用いた文が自然な文として解釈される場合があるとすれば、それは「学生にとって、飲み会で5000円はあんまり安くない(と思う／はずだ)」というように、「思う」あるいは「はずだ」と断定する主体である発話者の持つ金銭感覚を基準として判断がなされる場合であって、学生の金銭感覚を基準とした判断である場合ではないと思われる。これは、「あんまり～ない」が参照する基準は主体(発話者)の主観的なものであることを示していると考えられる。

さらに、「あんまり～ない」という発話に際しては、「プラス方向への期待」がなければならぬと考えられる。これは以下に挙げる例から示される。

- (41) a. あんまり美味しくない。  
 b. #あんまりまずくない。  
 c. [まずいことで有名な店の料理を食べて]  
 あんまりまずくない。

(41a, b) のような特に文脈のないものに関しては、一見「プラス方向への期待」を考慮する必要がないように思えるが、日常生活における我々の経験を考えると、このような場合においても「プラス方向の期待」が関わっていることがわかる。つまり、通常、食べ物に関しては「美味しい」ということが期待されるのであり、「まずい」ことは期待されないのである。特に文脈のない(41a, b)における程度評価は、プラス方向が「美味しい」、マイナス方向が「まずい」というスケールに基づいてなされており、それゆえ「美味しい」というプラス方向を基準として程度評価を行っている(41a)の「あんまり美味しくない」は自然となり、「まずい」というマイナス方向を基準として程度評価を行っている(41b)の「あんまりまずくない」は不自然となる。しかし、(41c)の場合、「まずいことで有名な店」という文脈から「まずい」ということが期待(予測)される。(41c)では「まずさの程度」に注目しているため、(41a, b)と異なり「美味しい」がスケールに含まれないことに注意されたい。このスケールにおけるプラス方向は「まずさの程度」が高く、マイナス方向は「まずさの程度」が低い。(41c)はプラス方向である「まずさの程度」が高いという期待を基準として程度評価を行っているため、「あんまりまずくない」が自然となるのである。以上から、「プラス方向への期待」が「あんまり～ない」にとって常に満たすべき条件であることが確認できる。

先に挙げた例において「あんまり」の使用が不自然となる理由は次のように説明できる。

(42) ??あんまり美味しくないけど、私にとっては美味しい。(= (31b))

(42)は「私にとっては美味しい」という表現が加わることによって文が不自然となっている例であった。(42)の主節「私にとっては美味しい」は、「(発話者にとって)満足のいく美味しさを満たしている」ことを表し、「あんまり」が使用された従属節は、評価対象となる何らかの食べ物が、発話者が「美味しい」と見なす基準よりも低いことを表している。以上を考え合わせると、(42)では従属節と主節が矛盾する評価を下していることになる。「あんまり」の使用が不自然なのは、この矛盾に起因するものであると説明することができる。

このように、「あんまり～ない」は、「私」という認知主体が持つプラス方向への期待を基準として参照・比較することにより程度評価を行い、評価対象が期待値よりも下に位置づけられることを表す表現である。つまり、「あんまり～ない」が参照するのは、他者とは共有されていないという意味での「主観的」な基準であると言える。

### 5.3.4 「そんなに～ない」が参照する基準

次に、「そんなに～ない」が参照する基準を考察する。

先に挙げた(39)において「そんなに」の使用が自然であることから、「そんなに～ない」が参照するのは「あんまり」と異なる基準であることが分かる。次の例を見てみよう。

(43) [目が疲れたと言う友人に対して]

A: こめかみを押してみたらどう?

B: (こめかみを押してみて)、(?そんなに／あんまり)効かないみたい。



(44) [目が疲れたと言う友人に対して]

A: そういう時ってこめかみを押したら気持ち良いよね。

B: (こめかみを押してみて) {そんなに／あんまり} 効かないみたい。

(44) と比較すると、(43) の「そんなに」は容認度が下がる。(43)、(44) で異なるのは A の発話のみである。(43A) においては、こめかみを押したときの効果については明示されていないが、(44A) はポジティブな効果を前提としていることが明示されている。これら 2 つの例において「そんなに」の容認度に差が生じることは、「そんなに」が本来持っていた指示性がまだ失われていないことを示唆している。これに対し、「あんまり」という表現は、相手の期待に関わりなく発話者が「効く」と思うかどうかを、発話者自身の主観に基づいて判断し、述べる表現であるため、(43)、(44) とともに容認可能である<sup>25</sup>。

次の (45) は (43) の類例であるが、(43) よりも「そんなに」の容認度が高くなっている。

(45) A: 村上春樹の本ってどう？

B: {そんなに／あんまり} 面白くないよ。

(45A) は (43A) と同様に中立的な質問であり、「そんなに」が参照し得る基準は (45A) には含まれていないはずである。それにも関わらず「そんなに」が自然なのは、「村上春樹」が人気作家であるという百科事典的知識によるものと考えられる。つまり、村上春樹は人気作家であり、人気作家の作品は面白いだろう、という推論が働くのである。(45) の「そんなに」はこの推論によって導入された高い「面白さ」の度合いを基準として参照していると説明することができる。あるいは、村上春樹の著書は世間で「面白い」とされており、それゆえ人気作家として認知されているが、「実際には世間で面白いと言われるほどは面白くない」ということを表しているとも考えられる。

このことから、「そんなに」が他者にも共有されているような基準を指示している可能性が窺える。この可能性を支持する例として、次の例を見てみよう。

(46) {そんなに／あんまり} 美味しくない。(= (30a))

母語話者の直観として、(46) において「そんなに」と「あんまり」のどちらを用いても、表される美味しさの程度は非常に近いと思われる。しかし、(46) において「そんなに」を用いた場合、「世間一般で美味しいとされるほどは美味しくない」という意味が読み取れるのに対し、「あんまり」を用いた場合にはそのような意味は読み取れず、あくまでも発話者が「美味しい」と思う基準を満たしていないことを表している。このように「そんなに」が「世間一般の基準」を参照すると考えれば、(47) における容認度の差が説明できる。

(47) {そんなに／??あんまり} 美味しくないけど、私にとっては美味しい。(= (31))

主節「私にとっては美味しい」が、「(発話者にとって) 満足のいく美味しさを満たしている」

ことを表していることは先に述べた。従属節「そんなに美味しくないけど」が、世間一般に「美味しい」とされるであろう値を基準とした評価であるとすれば、主節と従属節では、それぞれ異なる基準によって程度評価がなされているため、2つの評価は矛盾しないと説明できる。

(46)、(47)の「そんなに」は、世間一般に共有されていると話し手が想定する基準を参照していると考えられる。第4章で扱ったような指示性の高い「そんなに」が発話の現場や先行文脈に認められる対象を指示し、それを基準としていたのに対し、(46)、(47)の「そんなに」は、主体である「私」も、相手である「あなた」も、そしてそれ以外の世間一般の人も共有しているという意味で、「間主観的<sup>26)</sup>」な基準を参照していると言える。このような「そんなに」は、ダイクシス性という指示詞の特徴を失っており、「脱文脈化」したものであると考えられよう。

次に挙げる例は、「そんなに」が間主観的な基準を参照する程度評価であるという主張を支持するものである。

- (48) a. 子供が城山小学校にお世話になってますが、去年の夏ころから、「給食があんまり美味しくない」と言うようになりました。

([https://www2.city.kaizu.lg.jp/pub-info/sodan/sdn\\_disp\\_index.asp?sdnid=6](https://www2.city.kaizu.lg.jp/pub-info/sodan/sdn_disp_index.asp?sdnid=6))

- b. ??子供が城山小学校にお世話になってますが、去年の夏ころから、「給食がそんなに美味しくない」と言うようになりました。

「あんまり」が参照する主観的な基準と比較して、間主観的な基準は他者の主観に対する理解を始めとして、より多くの経験を必要とすると考えられる。(48)において、「あんまり」を「そんなに」に置き換えると不自然、あるいは非常に大人びた印象を受けるのは、これが小学生の子供の発話であり、通常小学生ほどの子供が、そのような高度な理解や多くの経験を重ねているとは考え難いためであると考えられる。

### 5.3.5 考察

以上の分析から、否定を伴う「そんなに～ない」の指示対象には、大きく分けて2つあると言える。1つは、(44)のように先行文脈によって形成または導入された比較の基準を指すものであり、もう1つは、(46)、(47)、(48)のように間主観的な基準を指すものである((45)は、どちらとも解釈できる)。前者は、先行文脈に直接的な指示対象は見られないものの、先行文脈によって形成され、導入された比較の基準を指しているという点で、前章で見た指示性の高い例((A)、(B))のバリエーションと考えることができよう。後者については、間主観的な比較の基準を指しており、発話の現場や先行文脈によって可変する対象を指すという指示詞の機能は見られない。つまり、文脈依存という指示詞の特性がなくなり、脱文脈化していると言える。従来の研究において指摘されてきた「指示性の喪失」は、本研究においては、後者の間主観的なものを指す「そんなに～ない」に当たるものとして位置づけられる。前章で(C)に分類した例も同様に位置づけられよう。

さらに、前章と本章で分析した「そんなに」の指示対象は、以下の表のように整理するこ

とができる。表2の右端の列が、間主観的な比較の基準を指す「そんなに」である。

表2

分類	(A)	(B)	(C)
聞き手優位	○	—	—
コンテキスト	○	○	—
共有	—	○	○

「そんなに」の指示対象は、表2のように3種類に大別することができる。指示性の高いものが指示詞の典型例（プロトタイプ）であるとするならば、従来「指示性の喪失」が見られるとされてきた（C）の例は、周辺例として位置づけられる。

## 6. おわりに—まとめと今後の課題

本稿では、従来の研究に欠けていた、指示詞研究を進める上での基本的前提に対して検討を行い、指示詞研究の基盤を築くことを試みた。さらに、日本語のソ系指示詞を含んだ表現である「そんなに」を分析することで、ボトムアップ的にソ系指示詞の意味・機能を明らかにした。

従来の研究において問題となっていた文脈指示のソ系指示詞に関しては、時間軸に沿った談話の流れを考慮することで、現場指示と同様に「聞き手が関与する事態」として説明できることを示した。さらに、従来「指示性の喪失」が見られるとされてきた例に関しても、弱いながらも聞き手とのつながりがあることを明らかにした。このことから、指示詞の意味・機能の規定には「聞き手」が必要不可欠であることを主張した。これは、指示詞（ひいては言語全般）の基盤がコミュニケーションにあり、その本質は「話し手と聞き手の注意の共有」であるという本研究における指示詞の捉え方を支持するものである。

今後の課題としては、他のソ系指示詞についても検証を行うとともに、コ・ア系指示詞についてもボトムアップ的に考察し、現場指示と文脈指示を統一的に説明することが挙げられる。また、本稿で示した指示詞の基盤の詳細化（コ・ソ・アの差異化）や、指示詞の基盤として示したモデルと、個々の表現の事例研究との結びつきを、より調和の取れたものにしていく必要もある。

日本語の指示詞は品詞を越えて分布し、感動詞などにもその拡張が見られる、高い柔軟性を持つ表現であると言える。指示詞の豊かな広がり在今后さらに明らかにしていきたい。

## 注

\* 本稿は、平成19年度に京都大学大学院修士学位論文として提出した「日本語指示詞の認知言語学的研究—ソ系指示詞の脱文脈化と間主観化を中心に—」に加筆・修正を加えたものである。

<sup>1</sup> メタ表現「という人」の使用からもそれが分かる。

- <sup>2</sup> 久野のソ系列の特徴づけに関しては、(i) 聞き手は知っているが話し手は知らない、(ii) 話し手は知っているが聞き手は知らないという、ある意味相反する2つの側面をもつという理論的な問題も指摘されている(田窪・金水 1996: 67-68)。(i)については、人称区分説、距離区分説のどちらを採っても現場指示的用法の拡張として捉えることが可能だが、(ii)については、現場指示的用法の延長として捉えることができない。よって、現場指示的用法と文脈指示的用法の関係を統一的に説明できる特徴づけとは言えない。
- <sup>3</sup> 独立的用法は、「文脈中の他の語句に照応することなく、直接に意図された対象を指示する」(黒田 1979: 41)もので、後に「直示用法(deictic use)」と呼ばれるものに相当する。照応的用法は、「用いられた文脈において、特定の先行詞と照応し、その先行詞が指示するのと同じ事物を指示する」(*ibid.*)のものである。
- <sup>4</sup> 黒田は、コ系の照応的用法の例は挙げていない。
- <sup>5</sup> 「あの」を用いた場合について、黒田は「この文は少し坐りが悪いかもしれない」(黒田 1979: 55)としている。この坐りの悪さについて、(後の説明で出てくるように)話し手は直接経験を推論の根拠としているのであるが、「聞き手の方では話し手の推論の根拠を知る由もないから、推論を推論として理解することができず、『推論』を逆用して、『人が何人も死んだらと推定されるような大火事』という概念的な理解を付け加えるより致し方なく、このあたりにぎこちなさを感じさせる因があるのであろう」(*ibid.*)と黒田は説明する。
- <sup>6</sup> 対話における独立的用法について、ここで簡単に触れておく。話し手が独り言で「あれ」と指していたものが、他者が介入し「あれ」の側に座を占めることにより、「それ」に変わる、というものが例として挙げられる。黒田はこの場合のソ系の特徴づけとして、「他者の直接的知識を、自己(意識)の直接的知識ではないもの(自己の直接的知識と対立するもの)として把握するものである」(黒田 1979: 58-59)とし、やはり聞き手(他者)という概念を積極的に取り込んではいない。
- <sup>7</sup> 田窪・金水は、指示詞の用法も黒田(1979)を受け継いでいる。ただし、注3でも触れた通り、「独立的用法」ではなく「直示用法」という名称を用いている。
- <sup>8</sup> 田窪・金水(1996)で提示された談話管理理論は、共有知識を否定しているという点で金水・田窪(1990、1992)から大幅な修正がなされている。田窪・金水が共有知識といった話し手の想定する聞き手の知識への言及を回避する理由としては、次のような理由が挙げられる。ある知識を話し手が有しており、これが聞き手と相互的に共有されているかどうかを確かめる場合、聞き手がこの知識を持っていることを話し手が知っているだけでは十分ではなく、まず話し手がこれを知っていることを聞き手が知っていなければならない、そのことを話し手が知っていなければならない……ということが無限に続く。(共有知識のパラドックスの詳細については、Clark & Marshall (1981)を参照のこと。ただし、Clark & Marshallは、最終的には、共有知識の存在を推測する根拠となる Grounds を共有しているという確信があれば良いとして、パラドックスを解消している(*ibid.*: 32-35)。)田窪・金水はこのような無限遡及を避けるため、言語形式の使用法の記述から聞き手の知識を排除しているのである。
- しかし、実際の会話においては、聞き手の知識の想定が不確かなとき、話し手がある表現形式を暫定的に用いて聞き手の反応を見たり(須賀 2007)、相手の知識に対して誤った推測をすることは稀ではない。田窪・金水が想定するような計算主義的な正確さは、実際の会話においては求められていないと言える。
- <sup>9</sup> 談話管理理論の理論的仮定の詳細は、田窪・金水(1996)を参照。
- <sup>10</sup> 金水(1999)によると、次の例のように、意味論的な条件ではソもアも使用可能な場合、どちらを用いるかは語用論的な理由によって決定されるという。

(i) 神戸にいいイタリア料理店があるんですが、こんど{そこ/??あそこ}に行ってみませんか?  
(*ibid.*: 75)

つまり、(i)のように説明的・提示的な文脈では、話し手は知識を持たない聞き手に合わせてI領域すなわち言語的文脈をベースにしてコミュニケーションを行うことがいわば義務づけられていると見ることができ、そうでないコミュニケーションは聞き手にとって負荷のかかる処理を強いることになるという。後者にはA系列を用いて指示する場合が当たる。聞き手にとって、自分は持っていないが相手は持っている知識を推論することは強い負荷となる。このことから金水は、説明的・提示的な文脈でソを使用することは、聞き手の負荷を最小にせよという語用論的な制約に基づく選択であるとしている。

- <sup>11</sup> 庵の指摘は、金水・田窪(1990、1992)に基づくものであるが、これは田窪・金水(1996)にも同様に当てはまる問題である。なお、庵の論は金水・田窪のモデルを全面的に否定するわけでも、モデル自体の部分修正を意図するわけでもなく、金水・田窪のモデルでは説明できない部分を「結束性(cohesion)」に基づくモデルによって説明しようとするものである。このような方向性をとることによって、庵は現場指

- 示と文脈指示の統一的説明を破棄している（庵 2007: 39）。
- 12 「対立関係」は先に見た阪田（1971）の（A）に、「融合関係」は阪田の（B）に当たるものである。「中立関係」は阪田の（B）を詳細化したものと考えることができよう。
- 13 「知覚対象指示」は、指示対象が現場にあり、話し手と聞き手がそれを知覚（視覚・聴覚）によってすでに了解しているかまたは了解することが可能な場合の指示用法（略して「知覚指示」）であり、「観念対象指示」は、指示対象が現場にはなく、話し手と聞き手がそれを観念的に了解しているかまたは了解することが可能な場合の指示用法（略して「観念指示」）である。
- 14 李は、コ・ソ・アそれぞれに「提示」と「照応」の機能の別を示しているが、ここでは割愛する。
- 15 第2章では挙げていないが、例外として高橋（1990）は「指示することば」と「指示すること」の関わりを論じる中で指示詞と指示詞以外の単語による指示の違いについて触れている。高橋の考え方は認知言語学の考え方に通じるところが多く参考になるが、指示詞ではなく指示表現を中心に論じられているものであることに加えて品詞に重点が置かれていることから、本研究では主な先行研究としては取り上げていない。
- 16 一般に「共同注意」として議論されているものは、正確には「視覚的共同注意（joint visual attention）」である。共同注意には視覚的なものだけでなく、聴覚的な「聴覚的共同注意（joint auditory attention）」もある（cf. 大藪 2004）。
- 17 Diessel（2006）が規定する指示詞の機能と非常に近いが、本研究では Diessel が用いる「対話者の共同注意の焦点の調整」という表現を用いていない。Diessel は共同注意を成立させる場合と、既に注意が向けられている複数の対象を区別する場合の両方があることを考慮した上でこの表現を用いているのであるが、この表現は既に共同注意の成立している対象のみが議論的となるという誤解を与える恐れがある。これは「共同注意」という用語が、「共同注意」が成立した後のことについてのみ言及するという印象を与えるためである。そのため、本研究では表現を変更した。
- 18 「そんなに」には類比用法（e.g. 「そんなにしたって見えやしないよ」（谷崎潤一郎『痴人の愛』）もあるが、この用法は明治・大正期の日本語においてしばしば見られる用法であり（島田 2005）、現在ではほとんど使われることはない。また、この用法は「そんなに」が動詞の必須項となっている点において程度用法と異なっており、両者は異なる形式として扱うことができる。
- 19 なお、「{こ／そ／あ} んなに」と同じ音数かつ表す意味も類似する表現として「{こ／そ／あ} れほど」も挙げられる。ただし、1つのユニットとしての語彙化の程度がかなり高いと思われる「{こ／そ／あ} んなに」と比較して、「{こ／そ／あ} れほど」は「{これ／それ／あれ} + ほど」への分析可能性が高く、それぞれの語彙の意味や機能の分析と同時に、この組み合わせで使われた場合に特有の性質に関する考察が必要になる等、記述が煩雑になる。これらの理由により、本研究では「{こ／そ／あ} れほど」は扱わない（「{こ／そ／あ} れほど」の分析としては井本（2000）を参照のこと）。
- 20 シナリオは他の例との統一のため適宜書式を変更している。また、例によっては最初に簡単な状況説明を加えている。
- 21 （27）はブログからの例であるため、話し手、聞き手ではなく書き手、読み手という対応関係である。
- 22 益岡・田窪（1992）では否定を伴った際の指示性の有無については述べられていない。
- 23 「あんなに」（ア系指示詞+んなに）と音が似ているが、「あんまり」は、指示詞を含まないことに注意されたい。「あんまり」の語頭の「ア」はア系指示詞ではない。「あまり」、「あんまり」の語源は「余り」であり（『日本国語大辞典』より）、指示詞とは無関係である。
- 24 5.2節における表現の表記はそれぞれの先行研究に従う。
- 25 ただし、（44）の場合、「あんまり」を用いると相手の持つ前提を無視することになるため、丁寧さを考慮すると多少不自然である。
- 26 本研究における間主観性の定義は、辻（編）（2002）に従い、「個々人の主観は（ある程度）他人との間で共有される」というものであるとする。

## 参考文献

- Ariel, Mira. 1988. Referring and Accessibility. *Journal of Linguistics*, 24: 67-87.
- Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time*. Chicago: University of Chicago Press.
- Clark, Herbert H. 1996. *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Clark, Herbert H. and Catherine R. Marshall. 1981. Definite Reference and Mutual Knowledge. In Aravind K. Joshi, Bonnie L. Webber, and Ivan A. Sag (eds.) *Elements of Discourse Understanding*, 10-63. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Diessel, Holger. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins.
- Diessel, Holger. 2006. Demonstratives, Joint Attention, and the Emergence of Grammar. *Cognitive Linguistics* 17(4): 463-489.
- Fillmore, Charles J. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford: CSLI Publications.
- Grice, H. Paul. 1975. Logic and Conversation. In Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics vol.3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.
- Hoji, Hajime, Satoshi Kinsui, Yukinori Takubo, and Ayumi Ueyama. 2003. Demonstratives in Modern Japanese. In Yen-hui Audrey Li and Andrew Simpson (eds.) *Functional Structure(s), Form and Interpretation: Perspectives from East Language*, 97-128. New York: Routledge Curzon.
- Lakoff, Robin. 1979. Remarks on *this* and *that*. *Chicago Linguistic Society* 10: 345-356, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar vol.2: Descriptive Application*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2001. Discourse in Cognitive Grammar. *Cognitive Linguistics* 12(2): 143-188.
- Langacker, Ronald W. 2002 [1993]. Deixis and Subjectivity. In Frank Brisard (ed.) *Grounding: The Epistemic Footing of Deixis and Reference*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. 2004. Deixis. In Laurence R. Horn and Gregory Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics* (Blackwell handbooks in linguistics), 97-121. Oxford: Blackwell.
- Peirce, Charles S. 1893. The Icon, Index, and Symbol. repr. in Hartshorne, Charles and Paul Weiss (eds.) 1960. *Elements of Logic*. (Collected Papers of Charles Sanders Peirce, Vol.2), 156-173. Belknap Press of Harvard University Press.
- Reed, Edward S. 1996. *Encountering the World: Toward an Ecological Psychology*. New York: Oxford University Press. [細田直哉 訳, 佐々木正人 監修 2000. 『アフォーダンスの心理学：生態心理学への道』, 東京: 新曜社]
- Taylor, John R. 2002. *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Tomasello, Michael. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, MA: Harvard University Press. [大堀壽夫・中澤恒子・西村義樹・本多 啓 訳 2006. 『心とことばの起源を探る：文化と認知』, 東京: 勁草書房]
- van Hoek, Karen A. 1997. *Anaphora and Conceptual Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Verhagen, Arie. 2005. *Constructions of Intersubjectivity*. Oxford: Oxford University Press.

- 庵 功雄. 2007. 『日本語におけるテキストの結束性の研究』 東京: くろしお出版.
- 池上嘉彦. 2003. 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標 (1)」, 山梨正明 他(編)『認知言語学論考』, 3: 1-49. 東京: ひつじ書房.
- 池上嘉彦. 2004. 「言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標 (2)」, 山梨正明 他(編)『認知言語学論考』, 4: 1-60. 東京: ひつじ書房.
- 板倉昭二. 2006. 『「私」はいつ生まれるか』 東京: 筑摩書房 (ちくま新書).
- 板倉昭二. 2007. 『心を発見する心の発達』 京都大学学術出版会.
- 出口雅也. 2004. 「“Negation”と“Negative evaluation”」, 『日本語用論学会第7回大会予稿集』 1-4. 日本語用論学会.
- 井上 優. 1992. 「指示表現を含む副詞成分の一特性—「コ (ソ・ア) ンナニ」を例に」『都大論究』 29: 13-22.
- 井本 亮. 2000. 「否定と共起した[指示詞+ほど]の用法について」『筑波日本語研究』 5: 18-38.
- 上原 聡. 2007. 「認知語形成論」, 山梨正明 (編)『音韻・形態のメカニズム』 (講座 認知言語学のフロンティア 1), 99-151. 東京: 研究社.
- 大藪 泰. 2004. 『共同注意: 新生児から2歳6か月までの発達過程』 東京: 川島書店.
- 岡崎友子. 2006. 「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について—ソ系 (ソ・サ系列) 指示詞再考」『日本語の研究』 2(2): 77-92.
- 小川典子. 2008. 「「そんなに～ない」と「あんまり～ない」における程度の基準について—指示詞の有無を中心に—」『日本語学会 2008 年度春季大会予稿集』 103-110.
- 小川典子. 2009. 「指示性の喪失」が見られるソ系指示詞について: スキーマと間主観化の観点から」*Proceedings of Kansai Linguistic Society*, 29 (印刷中).
- 金沢 創. 1999. 『他者の心は存在するか—<他者>から<私>への進化論』 東京: 金子書房.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』 東京: 大修館書店.
- 神尾昭雄. 2002. 『続・情報のなわ張り理論』 東京: 大修館書店.
- 川瀬 卓. 2008. 「弱否定と過度を表す副詞の史的考察」『日本語文法学会第9回退会発表予稿集』 213-220.
- 川端善明. 1993. 「指示語」『国文学 解釈と教材の研究』 38(12): 60-67.
- 金水 敏. 1999. 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』 6(4): 67-91. 言語処理学会.
- 金水 敏・岡崎友子・曹 美庚. 2002. 「指示詞の歴史的・対象言語学的研究」, 『対象言語学』 (シリーズ言語科学 4), 217-247. 東京大学出版会.
- 金水 敏・木村英樹・田窪行則. 1989. 『指示詞』 (日本語文法セルフ・マスターシリーズ 4) 東京: くろしお出版.
- 金水 敏・田窪行則. 1990. 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」, 日本認知科学会 (編)『認知科学の発展』, 3: 85-116. 東京: 講談社.
- 金水 敏・田窪行則. 1992. 「日本語指示詞研究史から／へ」, 金水 敏・田窪行則 (編)『指示詞』, 151-192. 東京: ひつじ書房.
- 工藤真由美. 2000. 「否定の表現」, 金水敏・工藤真由美・沼田善子『時・否定と取り立て』 (日本語の文法 2), 95-150. 東京: 岩波書店.
- 久野 暉. 1973. 「コ・ソ・ア」, 『日本文法研究』, 185-190. 東京: 大修館書店.
- 黒田成幸. 1979. 「(コ)・ソ・アについて」, 『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』, 41-59. 東京: くろしお出版.

- 小林由紀. 1997. 「先行表現」をもたない指示語—「その」の文脈指示とはいかに諸用法をめぐって『国文学研究』121: 68-79.
- 阪田雪子. 1971. 「指示語「コ・ソ・ア」の機能について」『東京外国語大学論集』21: 125-138.
- 佐久間 鼎. 1951. 『現代日本語の表現と語法 (改訂版)』東京: 厚生閣.
- 佐々木正人. 1994. 『アフォーダンス: 新しい認知の理論』東京: 岩波書店.
- 定延利之 (編) 2002. 『「うん」と「そう」の言語学』東京: ひつじ書房.
- 島田泰子. 2005. 「連用における例示と程度: コンナニ類の程度副詞化」, 『日本近代語研究: 飛田良文博士古稀記念』, 157-169. 春日部: ひつじ書房.
- 正保 勇. 1981. 「「コソア」の体系」, 『日本語の指示詞』(日本語教育指導参考書8), 国立国語研究所.
- 新藤一男. 1983. 「あまりの文法」『山形大学紀要 (人文科学)』10(2): 101-113.
- 須賀あゆみ. 2007. 「知識想定と指示確立のプラクティス」, 日本語用論学会第10回大会発表資料 (於関西外国語大学).
- 須賀一好. 1992. 「副詞「あまり」の意味する程度評価」『山形大学紀要 (人文科学)』12(3): 35-46.
- 鈴木智美. 2006. 「「そんな X…」文に見られる感情・評価の意味—話者がとらえる事態の価値・意味と非予測性」『日本語文法』6(1): 88-105.
- 高梨克也. 2007. 「「他者の認知の利用」の観点から見た言語使用」, 京都言語学コロキウム第277回口頭発表資料 (於 京都大学).
- 高橋太郎. 1990. 「指示語の性格」『日本語学』9(3): 4-21.
- 高橋英光. 2004. 「指示語の理解: 英語の *it* と *that*」, 大堀壽夫 (編) 『認知コミュニケーション論』(シリーズ認知言語学入門6), 25-53. 東京: 大修館書店.
- 高水 徹. 2003. 「比較副詞の容認可能性と文脈」『言語科学論集』9: 137-149.
- 田窪行則・金水 敏. 1996. 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3): 59-74.
- 谷ロ一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』東京: ひつじ書房.
- 東郷雄二. 2000. 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』7: 27-46.
- 中村芳久. 2004. 「主観性の言語学: 主観性と文法構造・構文」, 中村芳久 (編) 『認知文法論Ⅱ』(シリーズ認知言語学入門5), 3-51. 東京: 大修館書店.
- 新村朋美・ハヤシ・ブレンダ. 2008. *This, that and it from a Cognitive Perspective*. 『日本認知言語学会論文集』8: 439-449.
- 仁田義雄. 2002. 『副詞的表現の諸相』東京: くろしお出版.
- 服部四郎. 1968. 「コレ、ソレ、アレと *this*, *that*」, 『英語基礎語彙の研究』71-80. 東京: 三省堂.
- 服部 匡. 1993. 「副詞あまり(あんまり)について: 弱否定および過度を表す用法の分析」『同志社女子大学学術研究年報』44(4): 1-27.
- 服部 匡. 1994. 「アマリ〜ナイとサホド (ソレホド) 〜ナイ」『日本語日本文学』6: 1-21.
- 服部 匡. 2008. 「否定と呼応して大きくない程度を表す副詞の特性—内省による予測とコーパスによる検証」, 田野村忠温・服部 匡・杉本 武・石井正彦 『コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発Ⅱ』, 128-142.
- 林 奈緒子. 1999. 「指示機能をもつ程度副詞に見られる制約について—「こんなに」「あんなに」「そんなに」を例に」『言語学論叢』18: 25-38.
- 早瀬尚子・堀田優子. 2005. 『認知文法の新展開: カテゴリー化と用法基盤モデル』東京: 研究社.
- 半澤幹一. 1997. 「さししめす」, 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一 (編) 『文章・談話のしくみ』, 60-71.



東京: おうふう.

深田 智. 2001. 「“Subjectification”とは何か: 言語表現の意味の根源を探る」『言語科学論集』7: 61-89.

堀江 薫. 2004. 「談話と認知」, 中村芳久 (編)『認知文法論Ⅱ』 (シリーズ認知言語学入門 5), 247-278.

東京: 大修館書店.

堀口和吉. 1978. 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8: 23-44.

本多 啓. 2007. 「認知意味論、コミュニケーション、共同注意—捉え方(理解)の意味論から見せ方(提示)の意味論へ」『語用論研究』8: 1-13.

正高信男. 1993. 『0歳児がことばを獲得するとき: 行動学からのアプローチ』東京: 中央公論新社 (中公新書).

正高信男. 2006. 『ヒトはいかにヒトになったか: ことば・自我・知性の誕生』東京: 岩波書店.

益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法 (改訂版)』東京: くろしお出版.

三上 章. 1970. 「コソアド抄」, 『文法小論集』, 145-154. 東京: くろしお出版.

三上 章. 1972. 『現代語法新説』東京: くろしお出版.

森田良行. 2002. 『日本語文法の発想』東京: ひつじ書房.

森本順子. 1994. 『話し手の主観を表す副詞について』東京: くろしお出版.

森山卓郎. 2004. 「日本語における比較の形式」『月刊 言語』33(10): 32-39.

山田孝雄. 1908. 『日本文法論』宝文館.

山梨正明. 1992. 『推論と照応』東京: くろしお出版.

山梨正明. 1995. 『認知文法論』東京: ひつじ書房.

山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.

山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』東京: 開拓社.

山本秀樹. 2004. 「比較表現あれこれ」『月刊 言語』33(10): 24-30.

李 長波. 1994. 「指示詞の機能と「コ・ソ・ア」の選択関係について」『國語國文』63(5): 37-54.

李 長波. 2002. 『日本語指示体系の歴史』京都大学学術出版会.

## コーパス

『新潮文庫の100冊 CD-ROM版』1995, 新潮社.

『西鉄提供ラジオ番組「土曜ドラマ館」シナリオ集』

## 辞書

『大辞林』(第二版), 三省堂.

『日本国語大辞典』(第二版), 小学館.